

智積院の大願憲海旧蔵書について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000511

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



智積院の大願憲海旧蔵書について

松尾 芳樹

京都頂法寺の境内には、かつて能満院という塔頭があり、幕末期に大願憲海が主宰する仏画工房が置かれた。能満院の本寺である智積院には、この憲海に関わる写本類が多数所蔵されている。これらは憲海の弟子田村宗立の没後、その遺族から寄贈されたものだが、『智山書庫所蔵目録』に従えば、その数は少なくとも114点にのぼる。書物の多くは年紀があり、憲海の事跡を研究するための貴重な資料となっている。この憲海旧蔵書の内容を概観すると、事相関係の書物が多いことや、空海に関わる書物が多いことなど、憲海の思考をうかがわせる特徴が見られる。

主要項目：大願憲海 田村宗立 空海 智積院 長谷寺 能満院 悉曇

About the Transcripts which Priest Daigan Kenkai owned In the Library of Chishaku'in Temple

By Matsuo Yoshiki

There was the sub-temple Nôman'in within the enclosure of Chôhōji Temple in Kyoto before. Priest Daigan Kenkai presided over the atelier for Buddhist pictures in the temple at the last days of The Tokugawa shogunate. Chishaku'in Temple that is the head temple of Nôman'in owns a lot of transcripts related to him. These are the transcripts donated by the bereaved family of Tamura Sôryu who was the apprentice of Kenkai. That number reaches at least 114 items if it follows the catalog of "Chizanshoko-shozô-mokuroku" (The catalog of the books which the library of Chishaku'in owns). Kenkai wrote down the place and the date that it was made in most of those transcripts. Therefore, these are the precious materials to study his biography. And, there are many transcripts concerned with the Jiso (practical aspect of Exoteric Buddhism) and Priest Kûkai in the transcripts which Kenkai owned before. This collection of transcripts teaches us his thinking, too.

Key Term: Priest Daigan Kenkai, Tamura Sôryu, Priest Kûkai, Chishaku'in Temple,
Hasedera Temple, Nôman'in Temple, siddham

1. はじめに

京都市中京区にある紫雲山頂法寺は、六角堂の名で親しまれている。その境内にかつてあった塔頭能満院において、仏画の制作印行を行う工房を主宰した憲海は、会津に生まれ、豊山長谷寺に修学した僧である。14歳で会津を離れた憲海は、会津八角神社別当亀福院の住持となるため一時会津に戻っているものの、生涯の活動の大半を、畿内を拠点として行った。

彼の事跡については、すでに諸種の略伝⁽¹⁾により語られているが、近年、会津地方と長谷寺関係の資料を調査した阿住義彦氏の研究によって、年紀資料の整理にも先鞭がつけられ⁽²⁾、その全体像が視界に入りつつある。

これまで知られている、憲海の事跡に関する資料群としては、「長谷寺文書」⁽³⁾「金剛寺文書」⁽⁴⁾「智山書庫蔵書」⁽⁵⁾「田村宗立旧蔵仏画粉本」⁽⁶⁾をあげることができる。そのおのおのに特性があり、いずれも憲海研究に欠くことのできない資料群であるが、なかでも、真言宗智山派総本山智積院の蔵書である智山書庫中の憲海関連写本類は、量的なまとまりがありながら、近年ようやく阿住氏の紹介により、本格的な研究の端緒を得たにすぎない状態である。本稿では、公刊されている『智山書庫所蔵目録』⁽⁷⁾に従い、この智山書庫中の憲海資料について概観してみたい。

2. 憲海の生涯

憲海の生涯には幾つかの転機がある。その区画については、生活基盤を置いた場所に依じて形成されると見るのが、彼の行動を理解するためにも合理的である。近年明らかになってきた彼の出自に関する見解も含めて、ここでは、次のような六期に分けて考えたい。

第一期	幼年期	寛政10年（1798）～〈享和3年（1803）〉	1～6歳
第二期	高伝寺修学期	〈享和3年（1803）〉～文化8年（1811）	6～14歳
第三期	長谷寺交衆期	文化8年（1811）～天保4年（1833）	14～36歳
第四期	亀福院在往期	天保4年（1833）～弘化2年（1845）	36～48歳
第五期	入洛仮寓期	弘化2年（1845）～嘉永4年（1851）	48～54歳
第六期	能満院在往期	嘉永4年（1851）～元治元年（1864）	54～67歳

第一期は、寛政10年（1798）に会津藩領赤津富永（現福島県郡山市）において百姓定右衛門を父に生まれ、出家のため、富永を去るまでにあたる。出家の時期については、六歳という伝承があるにすぎず、裏付けのある資料はないが、極めて短い期間であったと考えて不都合はない。出家の動機が形成される期間にあたる。

第二期は、二本松藩領内安佐野の広伝寺（現福島県郡山市）において、憲梁（1753-1828?）を師として出家し、沙弥として修学する間である。天分があり、早熟の才を見せたことが伝承として伝えられており、真言僧としての基礎を身につけたと考えられる時期である。

第三期は、広伝寺を出立し、江戸を経由して畿内に入り、十四歳の沙弥ながら豊山長谷寺に交衆する期間である。沙門となり、所化として修学すること二十二年に及ぶが、在山中に、慈

光寺の鳳寛鏝慶（1748-1829）に伝法灌頂をうけ、さらに、長栄寺黙住信正（1765-1833）に進具して、正法律を護持するに至った。図像經疏の書写を行いながら豊山で修学を続けた期間である。

第四期は、豊山を去り、江戸を経て会津若松に入り、八角神社別当亀福院（廃寺。福島県会津若松市）の住持を務めた期間である。この時期に、生涯の随僧となる大成憲理（1828-1891）を越後から迎え、弟子とした。

第五期は、大成とともに亀福院を辞して入洛し、高山寺、山王寺などに寄寓しながら、図像經疏の収集に努める時期である。この時期、京都の絵師長谷川家が所蔵する粉本を多数書写している。

第六期は、洛中頂法寺境内にある智積院末能満院の住持として、仏画の制作や印行の工房を主宰し、印施千種の大願を実践する期間である。能満院の焼亡により、避難先の蓮光院で入寂した。

その生涯は、まさに僧としてなすべき事を全うしたものと言える。ただ、当時の僧侶の生き方としてみれば、特異な道を選んでいる点は、注目すべきであろう。

非常に若くして出家した特殊な事情はあるものの、彼の出発点は、豊山派の真言僧として、正統を行くものであった。彼は本山での修学を二十年以上続けており、これは宗団における学匠の道である。組織においては、幹部への道を歩んでいたことになる。

ところが、長谷寺交衆中、憲海は次第に独自の見識を以て行動しはじめる。正法律を堅持する黙住信正に具足戒を受けると、以後は宗団との関わりを希薄にしていくのである。正法律は、慈雲飲光（1718-1804）が戒律復興のため提唱した僧制のありかたであったが、黙住の師である飲光が、宗派の偏向から距離を置いたように、憲海もまた同じ道を選んだらしい。その後の彼の行動は、正法律を護持しつつ、僧のあるべき姿を模索するものとなる。それは、經疏図像の収集と印行という、極めて現実的、具体的な成果によって跡付けられる実践であった。

こうした彼の思考の背景には、正法律を唱え、理想の実現を志して揺るぎない行動力を示した飲光と、密教の正統をこの国にもたらし、その定着に尽くした空海への敬慕をうかがうことができる。それは、平たくいえば原点回帰を求める思考の傾斜であったが、一方で、僧侶というものの存在を本質から問いかける内省的な側面も持っていた。自分自身の存在理由を真摯に求めるところから、源流への眼差しが開かれたといえる。正法律に従う僧に共通する性質として、学問的な考究は、行動に裏付けられなければ意味をなさなかった。思想家としての憲海の特質は、まさにこの実践に集約されているのである。

長谷寺交衆期、すでに憲海は版刻に手を染めている⁽⁸⁾。古画典籍に関心を寄せる性癖とともに、彼が若い頃から開版への興味を持ち、それを実践していた点は、その後の行動の原型として重要である。会津地方での青年期において、すでに憲海が書の才能の片鱗を見せたという伝承がある⁽⁹⁾ように、憲海の信仰の特徴は、彼自身の特異な才能を基盤として形成されている。その写仏写経は、自身の信仰と学問が具体的な形象として凝固した姿といってよい。

生涯を通して、憲海の行動には明確な目的意識が見られる。その事跡は、信仰の道程を如実に示して澁みがない。ただ、このように行為によって表現される思考というものは、言語によ

って人の営みを理解しようとする者の接近を、しばしば困難にする。無言蔵という彼の字は、まさに彼の信仰のあり方を物語るものであった。

3. 智山書庫の憲海関係資料

智積院に寄贈された憲海蔵書について、小田慈舟氏は次のように述べている。「大願師珍藏の経本図巻等は焼失を免れた小部分が宗立師即ち後の田村月樵画伯によりて相承護持されたが、画伯の歿後未亡人によって画伯の遺品三二と共に京都絵画専門学校と大本山智積院とに寄贈せられたそうである。大願師が智山派の出身であったから智積院に納めたと聞く。多分喜福院が智山末なのであろう。」⁽¹⁰⁾

晩年月樵と号した田村宗立（1846-1918）は、丹波亀岡に生まれ、憲海のもとに出家し、能満院仏画工房の一員を務めた画僧であった。幕末期には西洋画の写实的表現に興味を持つようになり、関西洋画界の草分けの一人となっている。そのため、明治13年（1880）に開校した京都府画学校では、西宗すなわち西洋画教室の教員を務めた。宗立の死後、その遺品として仏画粉本が寄付された京都市立絵画専門学校（京都市立芸術大学の前身）は、その京都府画学校の発展的後身に当たる。

京都市立芸術大学に残る記録では、粉本の寄付は遺族により大正8年（1919）11月10日付で行われた。逝去の翌年のことであり、おそらく、時を同じくして智山への寄付も行われたと思われる。もちろん亀福院は高野山心南院末寺であって智山末ではないし、憲海は豊山出身であるため、智山に寄付されたのは、能満院の本寺であったことが最大の理由であったに違いない。宗立自身も、豊山を含めた他派他宗との関わりが強かったとは考えにくく、おのずと智山への寄付に至ったものと考えられる。

小田氏は、現存する能満院旧蔵品を「小部分」と称している。能満院が所蔵していた経軌図像が膨大なものであったことを想像させ、それが当時の伝承となっていた状況を推測させる。それでも尚、「田村宗立旧蔵仏画粉本」は、書物筆笥二竿分あり、数にして2500点を超す。一代に作られた仏画工房の粉本群として、質量ともに希有な遺産といってよい。

一方、智山書庫に納められた宗立遺族の寄付資料については、当時、目録が作られていないため、明確なことはわからなくなっている。ただ、『智山書庫所蔵目録』により、憲海もしくは能満院工房に関わる資料を選び出すと、付表のとおり、その数は少なくとも114件（139冊と3巻と15紙。139冊のうち2冊は刊本）に及び、憲海の思考を探る手掛かりとするには十分な内容を持っている。

これらの資料は経緯から見て、火災を免れ能満院から救い出された写本の一部と考えられる。幸い大半の資料に年紀が記され、すべて長谷寺交衆以後に書写されたものとわかる。年紀の分布状況をみれば、期間の長い第三期と第六期に属するものに資料数が多く、期間の短い第五期は少ない。制作時期についていえば、総じて、不自然な偏りを感じない資料群である。確かに、第四期に属するものは、期間の長さに比して少ないことが指摘できるが、憲海が亀福院の住持を務めた期間であり、その職責と、開版事業に関わっていた状況⁽¹¹⁾を考慮すれば、自らの研究に没入し難い状況があったものと推測される。むしろ憲海の繁忙を伝える証左と考えてよい

だろう。

目録から、写本の内容を判断すると、61件（73冊）が経軌に、36件（51冊）が章疏に分類され、他に伝授の際に授与される印信血脈や文書の写本を含む記録類が8件（5冊と9紙）、外典写本が3件（9冊）、縁起が1件（1冊）、絵図が5件（3巻と6紙）という内容になる。ここで経軌に分類した経、儀軌、真言、陀羅尼の類は全体の半数を超し、疏、論のほか、作法、次第、法則の口訣などを分類した章疏の類も全体の三割にあたる。絵図5件はすべて宗立旧蔵粉本と系統を同じくするものであり、寄贈の際の分別が徹底していなかった様子がうかがえる。

憲海の出自からして、密教関連の仏書が多いことは当然だが、別尊法、経法に関する経軌が多く見られることは、憲海の興味の対象を示して興味深い。田村宗立旧蔵粉本の構成から、憲海が収集する図像が尊像中心であることは、すでに知られている⁽¹²⁾。諸尊の像容に対する興味は自ずと、事相に関する書物を増加させる要因となったに違いない。憲海の写仏活動が、研究に裏付けられたものであることを、これらの書物からうかがうことができる。

また、憲海が優れていたと伝えられる請雨法について⁽¹³⁾は、『大雲輪請雨經』（付表「智山書庫憲海関連書一覧」（以下「一覧」とする。）3）、『請雨經龍王名字』（「一覧」35）、『天台善女龍王招請法・請雨法』（「一覧」43）、『清瀧肝腦神泉苑密』（「一覧」66）、『請雨秘決』（「一覧」67）など、複数の関係書物があり、他の経法関係書に比して資料が多い。憲海がこの法に親しんだ痕跡と見てよい。さらに、『止風雨陀羅尼經（金剛光焰止風雨陀羅尼經）』（「一覧」50）といった止風雨法に関わる写本もあり、請雨法との関連を考えれば、これもまた憲海の得意とするところであったかもしれない。

前掲した二種類の経は、ともに空海が将来した雑密經典である。憲海旧蔵書中には、雑密経軌が比較的多く、その中に空海による将来本も少なからず含まれている。前記のほかに『大孔雀明王經』（「一覧」6）、『pratisara maha vidya-raja（随求大明王）』（「一覧」17・40・42）、『毘沙門天王經』（「一覧」55）、『施諸餓鬼飲食及水法』（「一覧」61）といったものは、空海将来の雑密経軌である。憲海に空海に対する敬慕があったことは先にも述べたが、空海在世期に遡る密教の様相に対する興味も、疎かではないことがうかがえる。

空海に關係のある書物は、この憲海旧蔵書の中、決して少なくない。さきの将来本だけでも十数種類あり、著編物を中心に抜き出せば、『守護国界經念誦次第・持宝金剛念誦次第』（「一覧」2）、『十八道念誦梵本』（「一覧」9）、『十八道念誦梵本行法真言集』（「一覧」10）、『金剛界念誦』（「一覧」20）、『勸流 息災護摩次第』（「一覧」25）、『誡羅婆俱舍念誦略次第』（「一覧」37）、『金剛頂蓮華部大儀軌』（「一覧」78）、『沙門空海学法目録』（「一覧」84）、『即身成仏義』（「一覧」87）、『高祖大師年譜要略』（「一覧」90）、『太政官符』（「一覧」104）、『高野雜筆集』（「一覧」105）、『文鏡秘府論』（「一覧」107）、『高祖大師御真蹟卒塔婆之写』（「一覧」110）などがあげられる。

実に全体の三割は、何らかの意味で直接、空海と関わりがあることになる。しかも、その対象は、次第や口決のみならず、詩論、文書、書簡、年譜、目録など多岐にわたっており、空海その人に対する興味を考えなければ、書写の理由が説明できない内容である。書写時期の幅も

広く、憲海は、長く空海その人を研究の対象としていた。

文久元年（1861）憲海64歳の時、憲海は仁和寺で覚禪抄と十卷抄書写の機会を得て、これを書写しおわったと伝えられる⁽¹⁴⁾。智山書庫にこの写本は見あたらず、残念ながら、その顛末をうかがわせる記録もない。たとえこれが現実に完成していたとしても、能満院とともに焼失したのか、請われていずれかの寺院の什物となったか不明のままである。ただ、宗立旧蔵粉本においても、智山書庫蔵書においてもこの時期に書写されたものは極端に少なく、両書の書写にほとんどの精力を傾けた結果と推測することは可能であろう。この書写がかつて行われたことは、状況として信じるに足る。ただ、併せて語られるように、その後の仏画制作にこの図像集の模写が大きな影響を与えた、という事実を物語る資料はない。

智山書庫に残る資料は、あくまで、憲海の事跡の断片を記録するにすぎない。ただ、膨大な時間をかけた書写の作業が意味するものは重く、その背後にある思考を無視することはできない。他の憲海関連資料と関係付けることによって、彼の興味の対象を浮かび上がらせ、その思考の語り部となる貴重な資料とすべきなのである。すでに、これら憲海旧蔵書に記される墨書によって、憲海の事跡に補足された点は少なくない。智山書庫蔵書の憲海研究における位置を明らかにするためにも、以下その要点に触れてみたい。

4. 伝授と諸山巡歴

豊山での修学期間にあたる第三期に書写された資料には、憲海自身の伝授に関する資料が多く含まれている。まず、受法については、智山書庫の記録から報恩院流（饒慶・淳覚）（「一覽」98・102）、西院流（深融・竜肝）（「一覽」100・101・103）、伝法院流（禪忍）（「一覽」99）を受けたことが確認できる。

同時代の豊山の学僧として知られる海如（1834-1873）については、伝授の記録がかなり詳細に伝えられており⁽¹⁵⁾、これを参考にすれば、恐らく憲海においても、記録をとどめていない伝授がさらにあったと考えるべきだろう。後のことになるが、憲海が亀福院を去り入洛した頃、『勸流 息災護摩次第』（「一覽」31）、『勸流 伝法灌頂三卷式 全』（「一覽」80）、『安流八字文殊念誦法要』（「一覽」31）といった勸修寺流や安祥寺流の儀軌を書写している。単なる研究上の興味と見ることも可能だが、過去に伝授のあったことを背景とした収集と見るほうが、現実的である。憲海自身が記した学法の記録は遺されておらず、彼の受法の全貌を確認するすべはないが、ここで重要なことは、彼が正法律に進具する以前に、真言僧としての受法を重ね、学僧として確立していたことである。

また、文政11年（1828）の書写にかかる『梅尾山伝授次第』（「一覽」65）の存在をみれば、高山寺の僧護（1775-1853）からも伝授のあったことが推測され、正法律と深く関わる僧護との交わりも疎かなものではなかった。憲海が伝授を受けた饒慶も、慈雲の弟子であったから、正法律に関わる学僧との交わりが、彼の学問の形成に大きな影響を与えたことは間違いない。憲海の修学については、他の交衆僧と明らかに異なる視点が働いていた。

そうした、憲海の幅広い学殖を想定するとき、憲海が蓄蔵して不思議のない書物でありながら、見あたらないものが存在することは、残念でならない。例えば、正法律に関わる書物は全

く含まれていないし、宗立旧蔵粉本に関連資料が含まれ、憲海が深く関心を持っていたと思われる⁽¹⁶⁾ 神祇灌頂にかかわる書物も含まれていない。これらは、被災時に焼失したのか、保管中、何者かに譲渡されたのか、さまざまな憶測は可能だが、彼の思考を研究するには、大きな欠落を感じずにはいられない。この方面は、新出の資料に期待したい。

憲海は、天保2～3年（1831-32）頃、海如に報恩院流の伝授を行った。長谷寺時代、求められれば、状況の許す限り、阿闍梨としての務めを果たしていたと思われる。また、『不動護摩私記』（「一覧」77）には、「於羽州永居郷亀岡大聖寺伝授御持参本無之故書写之了」と墨書があって、亀福院時代に、遙々羽州にまで伝授のために赴いた記録がある。憲海の学殖からすれば、地方において、遠方からの伝授を請われて不思議はない。さらに亀福院や能満院においては住持を務めていたのだから、弟子に対する授戒、伝授は当然行われたであろう。幼少の土岐法竜（1854-1923）が晩年の憲海により剃度を受けたことも伝えられている⁽¹⁷⁾。憲海の授法は、長谷寺時代、亀福院時代、能満院時代を通じ、機会に臨んで行われていた。憲海旧蔵書中に、伝授にかかわる口訣や作法次第が少なからず見受けられるのは、彼の日常を伝える資料でもある。

憲海旧蔵書の奥書を見れば、書写がさまざまな場所で行われていることがわかる。これは田村宗立旧蔵粉本の留書にも見られる特徴であり、憲海が、長谷寺交衆中から、豊山における所化の務めと平行して、独自の研究態度を持っていた証左となっている。そして、この巡歴の記録は、彼の思考を知る上でも、重要な意味を持っている。

智山書庫蔵書と田村宗立旧蔵粉本の墨書などに基づき、憲海が、長谷寺交衆期に豊山以外のどのような寺院で図像経軌を書写しているかを、表にまとめたのが「憲海長谷寺交衆期諸山巡歴一覧（文化12年～天保3年）」である。所化としての務めを果たしながらの往来であるから、豊山からの交通に支障のない範囲にとどまる限界はあるものの、その巡歴先が、豊山派のみならず、智山や古義真言系の寺院に及んでおり、律寺や修験系寺院が含まれている点が興味深い。

ここで注目されるのは、正法律の寺に比して、真言律の寺に立ち寄った記録が、少ないことである。西大寺、野中寺にしても、泉涌寺にしても、憲海が立ち寄ることの難しい場所にあったわけではないのだが、記録に残されていない。もちろん、単純に資料が失われているだけなのかもしれないが、記録をそのまま憲海の行動の履歴と見て不都合はなく、憲海が早い時点から、戒律に対する自身の立場を明確に位置づけていたと考えるほうが、資料に対する適切な理解ではないかと考えている。

憲海は、長谷寺時代、亀福院時代に畿内と会津を往来している。この時、正確な経路はわからないが、『作法集雑記』（「一覧」15）のように麻布不動院（東京都港区）での書写をみれば、江戸を通過しているのは確かである。ただ、旅程の途中で、古刹などに立ち寄った様子はなく、江戸での滞在を除いて、書写を行った例はない。

この事実は、畿内での研究意欲からすると、少し意外な気もするが、彼が旅そのものを修行として考えていたとするなら、理解は可能である。憲海の中では、図像経疏の収集を貪るよりも、僧としてのあり方が、まず重視されたのである。僧が戒律を重んじて行動するというこ

表 憲海長谷寺交衆期諸山巡歴一覧（文化12年～天保3年）

年号	時期	寺院	所在地	典拠*	備考
文化12	1815				林岳憲海と改名。恐らくこのころ沙門となる。
文化13	1816				8月：悉曇の伝授あり（於長谷寺月輪院）
文化14	1817				
文政元	1818				
文政2	1819				
文政3	1820	2月・4月・6月 慈光寺(正法律)	大阪府東大阪市	智・宗	2月：饗慶により報恩院流「伝法許可勸頂印信」を受ける（於慈光寺）
文政4	1821				
文政5	1822	1月 竹林寺(不詳)	奈良県桜井市	宗	
		6月 仏隆寺(新義)	奈良県宇陀市榛原区	宗	
		8月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智・宗	
文政6	1823	9月 智積院遍照院(新義智山)	京都府京都市東山区	智	
		12月 智積院(新義智山)	京都府京都市東山区	智	
文政7	1824	3月 高野山如意輪寺(古義)	和歌山県伊都郡高野町	智	3月：弘栄に進流声明を学ぶ（於高野山南室院）
文政8	1825				12月：神祇灌頂志願の表明あり（場所不明）
文政9	1826	7月 久修恩院(真言律)	大阪府枚方市楠葉	宗	
		9月 醍醐寺三宝院(古義)	京都府京都市伏見区	宗	
		醍醐寺遍智院(古義)	京都府京都市伏見区	宗	
		智積院(新義智山)	京都府京都市東山区	宗	
文政10	1827	3月 醍醐寺三宝院(古義)	京都府京都市伏見区	智	3月：禅忍より伝法院流兼海方「印信血脈」を受ける。
					3月：深融より「西院流大事並血脈」を受ける
		醍醐寺報恩院(古義)	京都府京都市伏見区	智	3月：淳覚より報恩院流「伝法許可灌頂紹書血脈」を受ける（於醍醐寺報恩院）
	5月 慈光寺(正法律)	大阪府東大阪市	宗		
	6月 仁和寺(古義)	京都府京都市右京区	宗		
	高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗		
	閏6月 仁和寺心蓮院(古義)	京都府京都市右京区	智		
	高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗		
	7月 平等心院(真言律)	京都府京都市右京区	宗		
	8月 仁和寺心蓮院(古義)	京都府京都市右京区	宗	8月：龍肝より「西院流大事印信并血脈」を受ける	
	9月 高山寺十无尽院(古義)	京都府京都市右京区		9月：明恵本「大悉曇章」書写	
	10月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	宗		
	12月 与喜寺(新義豊山)	奈良県桜井市	宗		
文政11	1828	7月 高山寺十无尽院(古義)	京都府京都市右京区	智	7月：僧護より伝授あり（於高山寺十无尽院）
		8月 仁和寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
文政12	1829				1月：長谷寺版版本完成
		6月 高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		9月 安楽寿院明照院(新義)	京都府京都市伏見区	智・宗	
		12月 吉野山瑠璃光院(不詳)	奈良県吉野郡吉野町	宗	
天保元	1830	6月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	
天保2	1831	4月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	
		7月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智	
		11月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	大	
天保3	1832	3月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智	3月：黙住により具足戒を受ける（於高貴寺）
		4月・5月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	
		8月 高野山光勝院(古義)	和歌山県伊都郡高野町	宗	

*智＝智山書庫所蔵憲海旧蔵書。宗＝田村宗立旧蔵仏画粉本。大＝大正新修大蔵經。

は、決して自由なものではなかったし、それが旅となつては日常すら、厳しい制約の中に過ごさなければならなかった。もとより、憲海は、画家ではなく、宗教者の規範の中で自身の行動を律する存在である。憲海の図像収集に対する基本的な姿勢に思いを巡らせることのできる事実といえる。

自ら亀福院を辞した憲海は、以後豊山派を離れたと考えられる。畿内に入ってから、弟子の派遣や書簡のやりとりなどはあったが、長谷寺と積極的に接触した様子はない。そしてまた、正法律を護る寺に頼った形跡もなく、制度としての宗派からは、距離を置いたとしか思えない。これも憲海の原理主義的な立場の表れと見る事が可能であり、こうした態度は、長谷寺交衆期に芽生えてから、憲海の中に一貫して存在していたと考えられる。

憲海は、ひとまず高山寺に身を寄せ、その後、天台宗の山王寺（廃寺。室町通仏光寺下ル）に寄寓することになる。師僧である信正も饒慶もすでに遷化しており、僧護ひとり、高山寺にいまだ存命であったので、指導を仰ぐため尋ねたものであろう。僧護は正法律に進具したが、後にこれを離れた僧である。戒律を重んじながら、密教僧のあるべき姿を模索する憲海は、ともすれば孤立した存在となりやすく、僧護はこの上ない導師であったに違いない。憲海と僧護の関係は極めて興味深く、今後の研究課題とすべきである。

山王寺に身を寄せることになった経緯はわからない。ただ、すぐ近くの烏丸仏光寺下ルに、かつて長谷寺版両界曼荼羅の製作に際し、知遇を得ていたと思われる長谷川家があることと、何らかの関連があることは推測できる。山王寺での憲海の活動は、専ら図像の収集にあてられており、その中に長谷川家所蔵粉本の模写が多く含まれているからである。この時、憲海が図像経疏を書写する場を求めていたことは明らかであり、それが、やがて智山末の六角堂能満院での活動につながることになる。

能満院に入ってから憲海は、他山へ出向いて図像の収集を行うことが少なくなつたらしく、借用してきたものを写す例が多く見受けられる。大成をはじめ、宗立や雲道といった弟子たちの機動的な活動により、画像収集に費やされる労力のかかなりの部分を、彼らに託すことができるようになったことが、その理由であろう。憲海は、大願とした出版事業に、その持てる精力を傾けることができるようになったのである。

智山書庫には、憲海が上梓したものとして、嘉永6年刊の『梵学宗要章』（「一覧」85）、安政4年刊『即身成仏義』（「一覧」87）が遺っている。前者は憲海の著作であり、後者は空海の著作である。後に法雲尊峰（1834-1889）が再版した『四度次第』の刊行も知られているが、これは遺されていない。憲海による開版目録のようなものはないが、小原洪秀氏は「七八百種」に及んだと伝えており⁽¹⁸⁾、彼が発した大願が着実に実施されていたことを推測させる。ただ、宗立旧蔵粉本の中に遺された出版関係の資料をみれば⁽¹⁹⁾、その印刷物は決して大部なものばかりではなく、護符のようなものも含まれていたと考えられる。

5. 悉曇研究

文政7年（1824）に書写した『佳水耳目言（進流声明譜）』（「一覧」63）の墨書から、憲海は高野山西谷如意輪寺弘栄に就いて進流声明の伝授を受けたことがわかる。声明業は本来梵唄

のみならず悉曇をも含む学問である。文政13年（1830）書写の『大孔雀明王経』（「一覧」6）には「声明業兼学沙門無言蔵」とあり、声明業の研究は当時の彼の課題となっていたと考えられる。この『大孔雀明王経』は菅生寺において梵文と漢文の比較校正を行った書物で、憲海が声明業のうちに悉曇を一体として認識していることがうかがえる資料である。

菅生寺への登山は智山書庫蔵書の年紀から見る限り、この文政13年からはじまり、天保3年（1832）まで続いた。墨書から推測するに、この間菅生寺と高貴寺を交互に訪れていたらしく、書写した書物には悉曇に関わるものが多く見られる。天保3年6月20日に、この地で彼の著作のひとつである『梵学秘要篇』（「一覧」75）の草稿がまとめられているところから考えて、菅生寺における修学は、自らの悉曇研究のまとめを試みたものと考えてよい。しかもこれは、憲海が信正に進具した直後のことであり、彼が、正法律護持と悉曇研究を関連するものとして、認識していたことをうかがわせる。

そもそも憲海の悉曇研究の萌芽は、鈴木素友が伝える伝承から、会津時代にあったと思われるが⁽²⁰⁾、長谷寺に交衆して数年を経た文化13年（1816）に、沙門となったばかりの憲海は月輪院の院主より悉曇の伝授を受けている⁽²¹⁾。このときの師僧は明確ではないが、彼の悉曇研究は、ここに本格的にはじまったと考えられるので、およそ十六年を経て学問の区切りとしたようである。

自在院に遺る『大悉曇章』⁽²²⁾の写本を見れば、文政10年（1827）に高山寺の明恵旧所持本を書写したものとわかる。それを後に自在院において授与しているところから、空海自筆本から三度の転写を経たとされるこの写本を、憲海は重視していたらしい。憲海が記す悉曇の筆法については、慈雲流の影響は見られず、むしろ空海以来の伝承を強く受けているところから、この写本を参考とする憲海の態度には、一貫した意志を見て取ることができる。ただ、現在「弘法大師全集」に見られる同書と比較すると、本写本には一部に異同があり⁽²³⁾、憲海が期待していたほどには、空海直伝の姿をとどめていなかったらしい。憲海が悉曇においても、遠く空海の伝えたものを意識し、自身の座標を求めていたことは興味深い。

他に憲海旧蔵書の声明悉曇関係の書物としては、『十八道念誦梵本』（「一覧」9）、『十八道念誦梵本行法真言集』（「一覧」10）、『高祖大師御請来梵本』（「一覧」11）、『pratisara maha vidya-raja（随求大明王）』（「一覧」17・40・42）、『梵本普賢行願讃』（「一覧」18）、『maha vaisra-vanaya deva raja（摩訶吠室囉末那野提婆囉闍）』（「一覧」36）、『誡羅婆俱舍念誦略次第』（「一覧」37）、『梵字胎藏曼陀羅諸尊名号』（「一覧」38）、『buddha-usnisa-dharani（仏頂尊勝陀羅尼）』（「一覧」41）、『録外儀軌中梵字真言』（「一覧」46）、『梵学秘要篇』（「一覧」75）、『梵学宗要章』（「一覧」85）、『梵文訳語部類集』（「一覧」74）、『梵本 瑜伽課誦』（「一覧」91）、『東寺声明決疑抄』（「一覧」96）、「高祖大師御真蹟卒塔婆之写」（「一覧」110）などがある。大半は、悉曇研究というよりは事相研究のための写本とみられ、言語としての悉曇考究をうかがわせるものは一部である。その意味で、憲海の悉曇研究は、習熟はしていたが、新機軸を見せるものではなかったといえる。

このうち「高祖大師御真蹟卒塔婆之写」は、宗立旧蔵粉本の中にも拓本と双鈎本が遺される⁽²⁴⁾資料で、文政5年（1822）に空海自筆の伝承のある高貴寺の木製五輪塔婆から採った双

鈎本である。憲海の空海に対する敬慕の念をうかがわせるとともに、空海を悉曇研究との関わりの中に意識していることをあらわす証左となっている。

早くから錢慶や僧護ら正法律を伝える僧との交渉を持ち、高貴寺を訪れることもあった憲海であれば、慈雲流の悉曇研究に与する機会はあったと考えるが、憲海はそれを選ばなかったようである。高貴寺の蔵書を借用して、菅生寺で研究することになったのも、長谷寺においても、高貴寺においても、研究に没頭しがたい事情があったのであろう。そのころ慈雲流悉曇の後継者は、河内長栄寺の明堂諦濡（1750-1830）だが、憲海との交渉を示す資料は今のところ見いだせない。

菅生寺は義淵開創の伝説を持つ古刹ではあるが、幾度もの荒廃を経ていたため、この寺にどのような文書典籍が遺されていたか知る方法はない。ただ、もともと三輪寺慶円により復興された古刹でもあり、当時の菅生寺は、吉野桜本坊の快済による中興を受けて、寺勢を増している所であった。貴重な資料が移転されていた可能性は否定できない⁽²⁵⁾。憲海は、菅生寺を訪れる少し前から吉野に出向いているので、菅生寺に研究の場を得ることになった経緯については、何者か仲介する人物の存在が推察されよう。

ちなみに、憲海はこの菅生寺に淳如憲暢という弟子を伴っている。多くの戒律で行動を制約される律僧には、随僧の存在が一般の僧以上に重要な役割を担っていた。黙住に進具した直後であることを考えると、この僧がそうした役目を果たしていた可能性もある。名からすると、憲海にちなむ法諱を得た僧とも思われるが、憲海が亀福院へ出立して以後、両者の交渉を示す資料はない。田村宗立旧蔵粉本の中には、この憲暢の書写によるとみられる粉本が2点含まれる⁽²⁶⁾。達筆とはいえないが、的確な描写をみせており、憲海が弟子に図像書写を行わせる、早い例を見せている。

この寺で憲海が憲如に与えたのは『十八道念誦梵本』（「一覧」9）『十八道念誦梵本行法真言集』（「一覧」10）である。どちらも空海の著作といわれ、この十八道法というのは、密教における重要な修行である四度加行の一である。四度加行の制度は空海が定めたとも伝えられ、伝法灌頂を受けるものは、十八道、金剛界法、胎藏法、護摩法の四つの修法を修めなければならなかった。憲海の写本にはこの四つの修法に関わる資料が少なからず含まれており、憲海も他の阿闍梨同様、こうした修法に関わっていたことを示している。憲海旧蔵書に含まれる両部曼荼羅関連の資料の多くは真言や念誦に触れており、金剛界法、胎藏法に関わるものであったとみられる。

憲海旧蔵書には「金剛界三昧耶曼陀羅図」（「一覧」112）、「大曼陀羅惣図」（「一覧」114）の図像粉本が含まれ、田村宗立旧蔵仏画粉本を補っている。宗立旧蔵粉本中に高雄曼荼羅理趣会の模写がある⁽²⁷⁾が、憲海は晩年、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』（「一覧」58）を写し、大日経疏である『毘盧遮那成仏神変加持経義釈』（「一覧」97）を写すなどして、両部曼荼羅に関わる資料の収集を、生涯継続していた様子がうかがえる。

というのも、憲海は両部曼荼羅図行に対して特別の関心があったという伝がある⁽²⁸⁾。それは、空海が将来した現図曼荼羅への敬慕であり、具体的には正しい図像の継承と流布を意図するものであったらしい。憲海は、長谷寺における錢慶の曼荼羅講義を聴いていたはずだし、その錢

慶が発願した長谷寺版両部曼荼羅開版に関わった可能性もある。また、高山寺では僧護のもとで両部曼荼羅の校訂に携わる⁽²⁹⁾など、既に現図曼荼羅に対する研究については相当の進展を見せていたと思われる。憲海がその次の段階の事業として、いまだ誰もなしえてなかった、原寸大の現図曼荼羅の上梓というものを発願するのは、彼の思考からすれば、自然の流れであったといえる。憲海が立てた印施千種の大願の向こうに、両部曼荼羅開版を想定した可能性は極めて高い。

明治になり、尊峰の発願と憲海の弟子たちの努力によって開版された御室版両部曼荼羅についても、参考とされた図像集は高山寺僧護のもとにあったものだから、憲海の知見に触れていないはずはない⁽³⁰⁾。こうした諸種の資料は、憲海のもとに今少し蓄えられて不思議はないのだが、火災により失われたか、御室版制作のために持ち出されたまま散逸したか、宗立旧蔵粉本にも、智山書庫蔵書にも確認することができず、今ではその全容を知る手だてがない。智山書庫に遺る両部曼荼羅関係の資料は、絵図を除けば概ね曼荼羅伝授に関わるものと考えられる。

6. おわりに

智山書庫に所蔵される憲海関係図書のうち半数は、能満院住持時代に書写されたものである。その意味では、図像の体系的収集を試みて以後、長谷寺での修学期以上に、資料への関心が増していたのだろう。また、全体を通して、空海将来とされる雑密経軌の書写が多いことは、事相への関心と、密教の原点に対する興味が一貫していたことを示している。正法律を護りながらも、密教僧の存在理由を憲海は模索し続けていたのであり、これは、彼の思考の特質として注目される点である。

彼は、空海の著作を機会あるごとに書写し続けた。密教僧である憲海にとって、空海は宗祖として敬慕を超える存在であったに違いない。そして、信仰とは実践にほかならないと考える憲海は、釈迦在世の姿に対する憧憬を、自らの行動によって現実の世界にひきよせようとした慈雲の態度に、大きく共鳴していた。千衣縫製を祈願した慈雲を実践の規範としたと考えなければ、印施千種の大願は生まれ得なかったと思われる。

能満院は真言宗智山派の僧院であったが、傍らの頂法寺は天台宗の寺であり、その開創は聖徳太子に帰されていた。また、天台宗の比叡山に学ぶ親鸞はこの地に修行したため、浄土真宗の聖地ともなっており、この寺では、観音信仰を中心にさまざまな信仰のあり方が折り重なっていた。いってみれば、仏教宗派のモザイク状態のただ中で、憲海は戒律を護持しつつ、密教僧のあるべき姿と、民衆への布教を模索する日々だったのである。彼の日常はまさに市井にあって、自身の信仰と民衆の信仰の接点を模索するものであった。

本稿をなすにあたり、自在院阿住義彦様、総本山長谷寺教務部様には様々のご教示いただきました。深く感謝の意を表すとともに厚く御礼を申し上げます。

《注》

- (1) 憲海の伝記に触れたものとしては、a) 大村西崖「三本両部曼荼羅集」(1913年5月、仏書刊行会)。b) 田中海応「海如和上傳」(1924年12月、徳蔵寺)。c) 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、1928年6月)。d) 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)。e) 『密教大辞典』「憲海」の項(1931年9月、密教辞典編纂会。1968年11月、法蔵館より増訂版)。f) 坂井栄信「雑林抄－無言蔵憲海」(智山『宗報』169号、1964年8月。『栄信和尚遺稿遺墨集』(1980年11月、豊中不動寺)に収録)。g) 佐和隆研『御室版曼荼羅尊像集』(1972年5月、法蔵館)。h) 真鍋俊照「月樵道人と仏画」(『三彩』350号、1976年10月、三彩社)。i) 拙稿「無言蔵から大願へ－律僧憲海の思想」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻、京都市立芸術大学芸術資料館編。2004年3月30日、法蔵館)。j) 「自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲理」の足跡」(阿住義彦編、2006年5月、自在院)。k) 拙稿「六角堂能満院大願憲海の会津における事跡について」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』16号、2007年3月)。また、六角堂能満院粉本に関する報告として、l) 昭和61・62・63年度科学研究費補助金研究成果報告書「密教図像と粉本の調査研究」(研究代表者田村隆照、1989年3月)。m) 拙稿「六角堂能満院仏画粉本－画僧大願と幕末期の仏教図像」(『民族芸術』Vol.11、1995年、民族芸術学会)。n) 拙稿「田村宗立旧蔵仏画粉本における仏教版画について」(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』14号、2005年3月)においても憲海の伝記に触れている。
- (2) 前掲注1、j書、33-57頁。
- (3) 豊山長谷寺(奈良県桜井市)に遺される記録文書。交衆帳などがあるが、公刊はされていない。前掲注1、j書に一部が紹介される。
- (4) 金剛寺(福島県会津若松市)の所蔵する記録文書及び典籍。現在福島県歴史史料館に寄託されており、整理済みの資料が『福島県歴史史料館収蔵資料目録 第21集』に目録化されている。
- (5) 智山智積院(京都府京都市)の書庫に収蔵される記録及び典籍。『智山書庫所蔵目録 第一巻』智山伝法院編、1994年3月、真言宗智山派宗務庁)『智山書庫所蔵目録 第二巻』、智山伝法院編、1995年5月、真言宗智山派宗務庁)により目録化される。
- (6) 京都市立芸術資料館が所蔵する仏画粉本。『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』(京都市立芸術大学芸術資料館編。2004年3月30日、法蔵館)に半数近くが図録化される。
- (7) 前掲注5書。
- (8) 前掲注1、n書、4-5頁。
- (9) 前掲注1、k書、24-25頁。
- (10) 前掲注1、c書、291-292頁。
- (11) 「金剛寺文書」に含まれる『方服歌讃儀』(天保4年刊)、『八角宮喜福院無言蔵書刻 金剛壽命陀羅尼經』(天保7年刊)において、憲海は版下執筆や版刻に携わっている。
- (12) 前掲注4書。
- (13) 前掲注1、m書、144頁。
- (14) 前掲注1、c書。294-295頁。
- (15) 前掲注1、c書。291頁。
- (16) 田中海応「海如和上傳」(1924年12月、徳蔵寺)。25-27頁。

- (16) 「十種神宝図」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻(2004年3月、法蔵館)、4035)に「文政八年乙酉十二月廿四日／神祇汀志願者無言藏」とあるほか、「天照大神像」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻(2004年3月、法蔵館)、4024)や「天神七代像」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻(2004年3月、法蔵館)、4032)といった雲伝神道関係の図像を模写している。
- (17) 土宜法竜著、宮崎忍海編『木母堂全集』(1924年6月、六大新報社)「土宜法龍和尚傳」に「安政五年午年即ち五歳の時、伯母貞月尼に伴はれて伊勢國宮崎家に轉じ、同年同國河藝郡白子町觀音寺に入り、京都六角能満院大願に従ひ剃度し、法龍と稱し」としている。
- (18) 前掲注1、d書、312頁。
- (19) 前掲注1、n書、7-9頁。
- (20) 注9参照。
- (21) 川島家旧南照寺文書「悉曇十不可大事」の墨書。前掲注1、j書、34頁。
- (22) 自在院藏書『大悉曇章』。前掲注1、j書、21頁。
- (23) 例えば字母の荼(dha)字は大師伝来の字ではなく『悉曇字記』のものに誤写されている。こうした悉曇の誤伝については、田久保周譽『梵字悉曇』(平川出版社、1981)184-6頁に整理されている。
- (24) 田村宗立旧藏仏画粉本の中には、この高貴寺の木製塔婆の拓影と謄写が遺されている(100函-13・20-25・28)。文政5年8月14日に高貴寺不動堂で写されたことが、これら資料からわかる。
- (25) 『大正新修大藏經』卷78に収録される『秘抄(No.2489)』の第17巻注記に「天保二年辛卯十一月二十二日於龍門山修行寺寫得了無言藏」とあり、菅生寺で行われた書写ながら、特に他所から借覧している様子が無い。ちなみに、この『秘抄』も諸尊の梵字真言を研究する目的で行われたと思われる。
- (26) 田村宗立旧藏仏画粉本の中に、「高野山光勝院藏／辰八月二十四日／仏子憲暢写之」の墨書のある「秘鍵大師像」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻(2004年3月、法蔵館)、3119)がある。同じく「弘法大師空海像」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』下巻(2004年3月、法蔵館)、4118)にも、「高野山光勝院藏／八月廿四日／佛子十如写之」とあり、同一人物と思われる。
- (27) 「理趣經曼荼羅図」(『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』上巻(2004年3月、法蔵館)、1003・1004)。
- (28) 前掲注1、c書、283頁。同d書、312頁。
- (29) 前掲注1、d書、313-314頁。
- (30) 前掲注1、d書、314-316頁。

付表 智山書庫憲海関連書目録

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
	《経軌》										
1	文政5年	1822	12 / 28	摩怛利神法	写本	1冊	28	2-338	31-6	憲海	
	(奥) 文政五壬午十二月二十八日以御本奉書写之了 林岳憲海										
2	文政6年	1823	12 / 02	守護国界經念誦次第・持宝金剛念誦次第	写本	1冊	32	1-388	31-6	憲海	智積院
	(奥) 文政六癸未年十二月二日於洛東智積院方丈請故僧正弘基御所持之本奉写之了 豊山留学釈沙門林岳憲海										
3	(文政10年)	(1827)		大雲輪請雨經	写本	1冊	39	2-1	31-6	無言蔵	仁和寺心蓮院
	(奥) 御室心蓮院書写之畢 梵文以慧□護阿闍梨自筆本梵漢並書之委悉校合了 求法弟子無言蔵										
4	文政10年	1827	06 閏 / 20	大日經大讃・悉地出現品第六阿利沙・大師所撰書刊定目錄	写本	1冊	41	2-92	31-4	無言蔵	仁和寺心蓮院
	(奥) 文政十年丁亥閏六月二十日於御室心蓮院以梅尾山十無尽院本写得之了 無言蔵憲海										
5	文政12年	1829	07 / 24	伝流次第集	写本	9冊	81・58・99・69・82・119・80・77・111	2-159	31-6	無言蔵	
	(奥-北斗曼荼羅秘記他) 安永元年六月二十一日使門生書写之訖 権僧正如宝 / (中略) / 文政十二年七月二十四日以右御本書写之了 無言蔵										
6	文政13年	1830	06 / 27	大孔雀明王經	写本	1冊	35・42・29	2-2	31-2	無言蔵	菅生寺
	(奥) 石孔雀明經三卷以古写本奉書写之了于時文政十三年庚寅六月廿七日於和州龍門郷龍門山龍花台院菅生寺写得梵漢比校再三了 声明業兼学沙門無言蔵										
7	天保2年	1831	05 / 18	如法(不動愛染)勝軍地蔵法	写本	1冊	37	2-201	31-6	無言蔵	
	(奥) 天保二年辛卯五月十八日写得之了 無言蔵										
8	天保2年	1831	09 / 12	八千枚荒神供	写本	1冊	55	2-218	31-4	無言蔵	
	(奥) 天保二年辛卯九月十二日写得之了 無言蔵										
9	天保3年	1832	04 / 00	十八道念誦梵本	写本	1冊	35	1-384	31-6	無言蔵	菅生寺
	(奥) 天保三年壬辰初夏中旬於龍門山修行寺蘭若令書写校合弟子淳如房憲暢授与之小比丘無言蔵 / (中略) / 右十八道念誦梵本者先師無言蔵大願書写校合御自筆也依 hiksu 隆真師結願書写了 明治二十年丁亥一月七日 samumuhamsidvi 六十歳 / 敬刻此十八道念誦梵本一卷以行天下伏此願聞覺花菩提果者摸刻沙門隆真 執筆沙門大成										
10	天保3年	1832	04 / 00	十八道念誦梵本行法真言集	写本	1冊	28	1-384	31-3	無言蔵	菅生寺
	(奥) 天保三年壬辰初夏中旬於龍門山修行寺蘭若令書写校合弟子淳如房憲暢授与之小比丘無言蔵										
11	天保3年	1832	04 / 22	高祖大師御請来梵本	写本	2冊	81・81	1-205	8-3	無言蔵	菅生寺
	(奥) 天保三壬辰年四月二十二日於龍門山写得之了 小比丘無言蔵										
12	天保3年	1832	05 / 22	常求利天女作法	写本	1冊	36	1-398	31-6	無言蔵	菅生寺
	(奥) 天保三壬辰年五月二十二日奉書写了後日可有清書校合者也 無言蔵										
13	天保3年	1832	08 / 12	諸雜集	写本	1冊	38	1-431	31-6	無言蔵	
	(奥) 時文政十一戊子仲冬中浣使慧澄仏子拝写焉一校了 dhamamvrksa / 天保三壬辰年八月十二日卯一点写得之了 無言蔵										
14	天保3年	1832	12 / 09	秘密諸儀軌	写本	1冊	85	2-258	31-4	無言蔵	
	(奥) 天保三壬辰年十二月九日以印板折本写得之了 無言蔵										
15	天保4年	1833	02 / 18	作法集雜記	写本	1冊	39	1-279	31-6	無言蔵	麻布不動院
	(奥) 天保四年癸巳二月十八日於江戸麻布六軒町不動院以真福寺弘賢阿闍梨所持古本書写了 無言蔵										
16	天保5年	1834	04 / 11	大宝積經	写本	3卷1冊	51	2-103	31-4	無言蔵	
	(奥-卷56) 于時天保五甲午年卯月十一日奉写得之了 右五十五六兩卷以自在院蔵經之本校書 無言蔵										

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
17	天保6年	1835	08 / 27	pratisara maha vidya-raja (随求大明王)	写本	1冊	43	2-220	10-36	無言蔵	亀福院
	(奥) 天保六乙未年八月二十七日於陸奥会津若松八角宮精舍奉書写 小比丘無言蔵							空海請来。			
18	天保6年	1835	09 / 09	梵本普賢行願讃	写本	1冊	34	2-332	31-3	無言蔵	亀福院
	(奥) 天保六乙未年九月九日於陸奥会津総鎮守八角宮社喜福精舍書了 小比丘無言蔵							空海請来。			
19	天保7年	1836	09 / 05	五種密儀軌	写本	1冊	67	1-226	31-4	無言蔵	
	(奥) 天保七申年九月五日奉寫得了 小比丘無言蔵							空海請来。			
20	天保14年	1843	06 / 20	金剛界念誦	写本	2冊	69・81	1-249	31-6	無言蔵	亀福院
	(奥一下) 天保十四年夏六月二十一日於会津八角宮第三転書写之了 比丘無言蔵							空海他撰。			
21	天保14年	1843	07 / 12	胎藏法真言	写本	1冊	63	2-75	31-3	無言蔵	亀福院
	(奥) 天保十四年癸卯七月十二日於会津八角宮喜福精舍奉集寫了 比丘無言蔵										
22	天保14年	1843	07 / 25	大悲胎藏念誦法	写本	2冊	66・59	2-96	31-6	無言蔵	
	(奥) 天保十四癸七月二十五日校写私記了 比丘無言蔵										
23	弘化2年	1845	02 / 18	瑜伽集要埵口施食儀	写本	1冊	31	2-378	31-4		亀福院
	(奥) 弘化二乙巳年二月十八日於会津八角宮以藏經本写得之了										
24	嘉永2年	1849	01 / 00	最勝王經陀羅尼	写本	1冊	32	1-269	31-3	無言蔵	(高山寺)
	(奥) 嘉永二己酉正月梅尾山写本写之了 無言蔵										
25	嘉永2年	1849	04 / 19	勸流 息災護摩次第	写本	1冊	35	1-122	31-6	無言蔵	(山王寺)
	(奥) 嘉永二年己酉卯月十九日梅尾山經庫之本 東第十二箱 方便智院朱印右表紙御修復依令奉修補了因之早々写得之了 無言蔵皇都山王寺寓中							空海撰。勸修寺流。			
26	嘉永3年	1850	04 / 05	仏眼仏母念誦次第	写本	1冊	19	2-279	31-6	無言蔵	山王寺
	(奥) 嘉永三年庚戌四月五日於山王寺書寫了 無言蔵										
27	嘉永3年	1850	04 / 06	宝樓閣念誦次第 略法	写本	1冊	21	2-307	31-6	無言蔵	
	(奥) 嘉永三庚戌四月六日辰刻書写之了 無言蔵										
28	嘉永3年	1850	07 / 25	金光明最勝王經 六	写本	1冊	54	2-423	10-36	無言蔵	山王寺
	(奥) 文政十三年卯月十四日於南都東大寺真言院書写之/時嘉永三年庚戌七月二十五日於皇都室町山王寺重而書寫了 無言蔵										
29	嘉永4年	1851	01 / 15	如法尊勝法 勸流	写本	1冊	58	2-201	31-6	無言蔵	(醍醐寺報恩院)
	(奥) 右一帖勸流聖經也醍醐山報恩院御本写之了 嘉永四辛亥正月十五日無言蔵							勸修寺流。			
30	嘉永4年	1851	04 / 30	宝篋印陀羅尼經	写本	1冊	16	2-304	31-4	無言蔵	山王寺
	(奥) 嘉永四年辛亥卯三十日於京都山王寺以亮汰鈔三卷書写之了追而可達清書者也沙門無言蔵							空海請来。			
31	嘉永4年	1851	06 / 14	安流八字文殊念誦法要	写本	1冊	44	1-28	31-6		能満院
	(奥) 嘉永四年辛亥六月十四日於京六角能満院書写一校了							安祥寺流。			
32	嘉永7年	1854	02 / 05	摩利支天法	写本	1冊	30	2-341	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 于時嘉永七甲寅二月五日 出羽莊内鶴ヶ岡龍覚寺宗賢法印依頼主命而異国軍船消除祈願仍而右天法申来早々書集了 六角堂能満院大願										
33	嘉永7年	1854	07 / 00	如意輪觀世音護摩法	写本	1冊	19	2-199	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 嘉永七年甲寅七月 王城中真六角堂能満院 大願草之了										
34	嘉永7年	1854	08 / 12	青面金剛法	写本	1冊	27	1-415	31-6	大願	能満院
	(奥) 時嘉永七年甲寅八月十二日於王城中心六角堂能満院大願草書之										
35	安政2年	1855	03 / 08	請雨經龍王名字	写本	1卷1冊	38	1-396	29-6	無言蔵	
	(奥) 建久九年之比以榮然公令清書 一老比丘興然七十九/文政十三年三月日写得之了 無言蔵大願/安政二年乙卯三月八日重写之了							空海請来。			
36	安政2年	1855	11 / 01	maha vaisravanaya deva raja (摩訶吠室囉末那野提婆囉闍)	写本	1冊	47	2-338	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 安政二年乙卯十一月朔日右本写得之了 王城中真六角堂能満院大願							空海請来。			
37	安政3年	1856	01 / 18	識羅婆俱舍念誦略次第	写本	1冊	49	1-132	31-4	大願	(高山寺)
	(奥) 安政三丙辰正月十八日以梅尾山藏本一軸三十一紙写得之了 京六角堂能満院大願五十九							空海撰。			
38	安政4年	1857	09 / 00	梵字胎藏曼陀羅諸尊名号	写本	1冊	23	2-329	31-3	大願	能満院
	(奥) 享保十四年九月二十六日於高野山新別所門通寺以無量寿院藏本謄写之畢 沙門覚勝/安政四年九月於王城中真六角堂能満院 写之了 大願							空海請来。			
39	安政5年	1858	12 / 07	華嚴經 般若訳 [大方広仏華嚴經卷第十五]	写本	1冊	51	1-162	31-4	大願	(黄蘗山万福寺)
	(奥) 安政五戊午十二月七日以黄蘗山印本書写之了 能満院大願六十一										

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
40	安政 6 年	1859	02 / 13	pratisara maha vidya-raja (随求大明王)	写本	1 冊	40	2-220	10-36	大願	能満院
	(奥) 安政六年己未二月十三日於王城中真紫雲山頂法寺能満院奉書写訖 沙門大願六十二歳							空海請来。			
41	安政 6 年	1859	02 / 19	buddha-usnisa-dharani (仏頂尊勝陀羅尼)	写本	1 卷 1 冊	32	2-318	9-36	大願	能満院
	(奥) 安政六年己未二月十九日夜丑刻於王城中真六角堂能満精舎以梶尾明恵上人御本奉写了 沙門大願 (六十二歳) 授与雲道房憲伝										
42	安政 6 年	1859	03 閏 /11	pratisara maha vidya-raja (随求大明王)	写本	1 冊	35	2-219	10-36	大願	高山寺閼伽井坊
	(奥) 文政十三年庚寅閏三月十一日於梶尾山閼伽井坊以右御本写得之重而安政六己未交写之了 大願六十二 王城中心六角堂能満院							空海請来。			
43	安政 6 年	1859	07 / 05	天台 善女龍王招請法・請雨法	写本	1 冊	36	2-134	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 安政六己未年七月五日 王城中真六角堂能満院大願										
44	安政 7 年	1860	03 / 20	録外儀軌中画像法	写本	1 冊	62	2-409	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 庚申三月二十日録外十三卷儀軌中拔書 六角堂能満院大願六十三										
45	万延元年	1860	03 / 22	十二天報恩品護摩頌 (供養十二天威徳天報恩品一卷)	写本	1 冊	23	1-378	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 安政七改元万延元年三月二十二日以録外印版本書写之了 六角堂能満院大願六十三										
46	安政 7 年	1860	03 / 30	録外儀軌中梵字真言	写本	1 冊	45	2-409	31-3	大願	(能満院)
	(奥) 以印版折経書写之了 安政庚申三月晦日初雷西方日 六角堂能満院大願六十三										
47	安政 7 年	1860	03 閏 /03	大使咒法経並含光記	写本	1 冊	30	2-11	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 延宝九天 (辛酉) 仲春日 経蔵院住英信書写之／安政七庚申閏三月三日以上狛村延命院蔵本写之 六角堂能満院大願										
48	安政 7 年	1860	03 閏 /16	天台 例講法則三十三卷経千卷心経	写本	1 冊	19	2-407	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 万延元庚申閏三月十六日以下鴨松林院亮薫師本写之了 六角堂能満院大願六十三										
49	万延元年	1860	04 / 26	安像三昧儀軌経	写本	1 冊	15	1-24	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 万延元年庚申四月二十六日極晴天書写了 王城中心六角堂 能満院大願六十三										
50	万延元年	1860	05 / 10	止風雨陀羅尼経 (金剛光焰止風雨陀羅尼経)	写本	1 冊	25	1-347	31-4	大願	(延命院)
	(奥) 辛丑歳高麗国大蔵都監奉勅雕造／万延元庚申五月十日以南山城上狛延命院儀軌中一校了 六角堂大願							空海請来。			
51	安政 7 年	1860	09 / 19	buddha-usnisa-dharani (仏頂尊勝陀羅尼)	写本	1 冊	35	2-318	10-36	大願	(能満院)
	(奥) 万延元庚申九月十九日奉書写了 王城中心紫雲山頂法寺沙門大願六十三										
52	文久元年	1861	01 / 24	大黒天神法	写本	1 冊	24	2-5	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 万延二年辛酉正月二十四日夜書写了 王城中心六角堂頂法寺能満院大願六十四										
53	文久元年	1861	03 / 12	墓所地取作法	写本	1 冊	15	2-312	31-6	大願	
	(奥) 文久元年辛酉三月十二日書写了 大願										
54	文久元年	1861	11 / 30	伊勢朝熊求聞持作法	写本	1 冊	25	1-31	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 文久元辛酉年十一月三十日右本從勢州為一見到来仍而写得之又別有口決書半紙四十五丁書写了 王城中心六角堂能満院 大願										
55	文久 2 年	1862	01 / 05	毘沙門天王経	写本	1 冊	98	2-230	31-3	大願	(能満院)
	(奥) 文久二壬戌年正月五日節分以印板校合本写得了 王城中心六角堂能満院大願六十五							空海請来。			
56	文久 2 年	1862	01 / 12	聖觀自在菩薩心真言瑜伽親行儀軌	写本	1 冊	64	1-397	31-3	大願	(能満院)
	(奥) 文久二壬戌年正月十二日於王城中心六角堂能満院大願六十五							空海請来。			
57	文久 2 年	1862	02 / 05	陀羅尼集経	写本	4 卷 2 冊	88・64	2-111	31-3	大願	(能満院)
	(奥) 文久二年壬戌二月五日写得之了 王城中心六角堂能満院大願六十五										
58	文久 2 年	1862	02 / 28	金剛頂瑜伽他化自在天理趣會 普賢修行念誦儀軌 他	写本	1 冊	60	1-259	31-3	大願	(能満院)
	(奥) 文久二年壬戌二月二十八日王城中心六角堂能満院 大願六十五							空海請来。			

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
59	文久2年	1862	03 / 06	諸菩薩部 秘密儀軌 震十八	写本	1冊	76	1-453	31-6	大願	能満院
	(奥) 文久二年壬戌三月六日於王城中心六角堂能満院写得之了 大願										
60	文久2年	1862	03 / 10	成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌	写本	1冊	43	1-406	31-6	大願	能満院
	(奥) 文久二年壬戌三月十日於六角堂能満院書写了 大願										
61	文久2年	1862	08 / 19	施諸餓鬼飲食及水法	写本	1冊	10	1-479	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 以上尾州八事山興正寺諱忍著施餓鬼問弁二出 文久二壬戌年八月十九日六角能満院大願										
	空海請來。										
	《章疏》										
62	文政3年	1820	02 / 20	伝法灌頂諸作法 幸心	写本	1冊	40	2-148	31-6	無言藏	慈光寺
	(奥) 右諸加持五枚折紙文政三庚辰年於河州髮切山慈光律寺伝受之御奉書写之了 無言藏										
63	文政7年	1824	03 / 00	佳水耳目言 (進流声明譜)	写本	7卷7冊	全486	1-471	31-5	無言藏	高野山西谷如意輪寺
	(奥) 文政七甲申年三月登於南山而入進流声明之門密隨如意輪寺弘榮老師請指南之余力於南室院道場昼夜書写伝授了御本紙一々各別分部類今恐紛亡私合□□□□進流声明未資無言藏林岳憲海										
	声明研究。										
64	文政10年	1827	03 / 28	曼陀羅供并汀庭儀式	写本	1冊	80	2-343	31-6	無言藏	醍醐寺三寶院
	(奥) 右三寶院殿御灌頂内道場等承仕役勤之自三月十三日夕御印可了同二十四日ヨリ出勤旅宿所寺中六坊之内金蓮院二仮住ス予教授僧正之徒僧役勤之初後夜等委曲奉拝聽了 于時文政十年丁亥三月二十八日也 無言藏写得了										
65	文政11年	1828	07 / 28	梅尾山伝授次第	写本	1冊	84	2-168	31-6	無言藏	高山寺十無尽院
	(奥) 于時文政十一年戊子七月二十八日於梅尾山十無尽院隨僧護阿闍梨奉伝授書写了 無言藏										
	僧護関連書。										
66	文政12年	1829	06 / 25	清瀧肝腦神泉菟密	写本	1冊	56	1-477	31-4	無言藏	高山寺十無尽院
	(奥) 文政十二年丑六月二十五日於梅尾山關伽井坊十無尽院一昼夜写得之了 本紙定真上人筆蟲虫入難見後日歸山而欲令清書耳 無言藏大願										
67	文政12年	1829	06 / 25	請雨秘決	写本	1冊	80	1-396	31-4	無言藏	高山寺關伽井坊
	(奥) 文政十二己丑年六月二十五日於梅尾山關伽井坊伝受書写畢 無言藏大願/安政二乙卯二月二十八日以庵紙稿写了追而可清書之也										
	安政2年清書本。										
68	文政12年	1829	09 / 13	摧勝述記	写本	1卷1冊	75	1-270	9-37	無言藏	安樂寿院明照院
	(奥) 右一冊義宝法淫製作當時可可在之處未能披閱之然從根來寺或客僧持來之間則以他筆写留者也殊自流之祖師 (從先師三代前) 之著述自然之到來隨喜之余旁令書之矣写本云文字云文言不審繁多之上此筆者又以外之訛謬多之後後日求正本可書之而已 于時永祿六年林鐘二十一日 法印堯運七十有六 (中略) / 文政十二年己丑九月十三日於洛南竹田安樂寿院明照院以智積院山内之本写得之了 無言藏										
69	文政12年	1829	12 / 06	大随求陀羅尼略句義	写本	1冊	60	2-70	31-4	無言藏	
	(奥) 寛政戊午仲冬京師阿弥陀寺拝写 dhamamvrksabanman / 時文政十二己丑歲臘月六日為先師尊慶和上仏果書写以奉無言阿闍梨了如海和尚										
70	天保2年	1831	04 / 00	大元大藏勘同總録	写本	1冊	43	2-4	31-4	無言藏	菅生寺
	(奥) 天保二年辛卯孟夏中旬於竜門山菅生寺以葛城山高貴律寺御本写得此一巻了 無言藏										
71	天保2年	1831	04 / 22	金剛界胎藏法念誦真言校合記	写本	1冊	60・64	1-248	31-2	無言藏	菅生寺
	(奥・胎藏法) 明和戊子六月十一日於京師一校/右以草本写得之了 無言藏 天保二年辛卯四月二十二日於竜門山菅生寺請葛城山御本										
72	天保2年	1831	07 / 23	瑜祇經修行法	写本	1冊	62	2-382	31-4	無言藏	高貴寺
	(奥) 天保二年辛卯七月二十三日於河内州葛城山高貴律寺写得之了 無言藏										
73	天保2年	1831	08 / 09	幸心 秘鈔	写本	1冊	87	1-203	31-4	無言藏	
	(奥) 貞応元年九月十日於遍智院奉伝受了 (中略) / 右以御本奉早写得了 天保二年辛卯八月九日 無言藏										
	報恩院流。										
74	天保3年	1832	03 / 15	梵文訳語部類集	写本	2冊	60・64	2-332	31-4	無言藏	高貴寺
	(奥) 天保三年壬辰三月十五日於河州葛城山高貴律寺写得之了 無言藏										
	悉曇研究。										

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
75	天保3年	1832	06 / 20	梵学秘要篇	写本	1巻1冊	47	2-326	25-28	無言蔵	菅生寺
	(奥) 天保三壬辰年六月二十日於和州龍門山菅生寺草之了							憲海編。悉曇研究。			
76	天保11年	1840	05 / 17	伝法灌頂記	写本	1冊	88	2-140	27-54	無言蔵	
	(奥) 師主説云二卷尊勝軌可見之云云 / (中略) / 天保十一庚子年五月十七日写得了 無言蔵										
77	天保13年	1842	03 / 29	不動護摩私記	写本	1冊	21	2-283	31-6	無言蔵	出羽国大聖寺
	(奥) 天保十三壬寅年三月二十九日於羽州永居郷龜岡大聖寺伝授砌持参本無之故書写之了 無言蔵										
78	天保14年	1843	05 / 28	金剛頂蓮華部大儀軌	写本	1冊	75	2-423	10-36	無言蔵	
	(奥) 天保十四癸卯五月二十八日書写了 比丘無言蔵							空海撰。			
79	嘉永元年	1848	08 / 10	印融二十四帖並後記	写本	2巻2冊	91・80	1-57	31-6	無言蔵	山王寺
	(奥) 于嘉永元年戊申八月十日以戒龍師書本本書之原本堅四寸横三寸薄用紙小本二十九帖有之今私改之為件本二冊偏散失如此 於皇都室町山王町山王密寺 寓居沙門無言蔵										
80	嘉永2年	1849	08 / 25	勸流 伝法灌頂三卷式 全	写本	1冊	51	1-122	31-6	無言蔵	山王寺
	(奥) 嘉永二年己酉八月二十五日於皇都室町通高辻上ル山王町書写了 無言蔵							勸修寺流。			
81	嘉永4年	1851	11 / 17	阿字秘釈	写本	1冊	27	1-7	31-4	無言蔵	能満院
	(奥) 嘉永四年亥十一月十七日於京六角能満院 以醍醐山報恩院蔵古本写得之了 無言蔵										
82	嘉永5年	1852	02 閏 / 03	瑜伽伝灯抄	写本	10巻5冊	27・27・23・29・24・23・22・28・41・22	2-379	31-2	無言蔵	能満院
	(奥) 享祿四年十月三日写之畢 / 嘉永五 (壬子) 年閏二月三日於皇都六角堂中能満院以西山宝幢院御本写得之了 無言蔵							報恩院流。			
83	嘉永5年	1852	08 / 00	大黒天和讃	写本	1冊	12	2-6	31-4		能満院
	(奥) 嘉永五壬子年八月吉祥日 王城中真六角堂 紫雲山頂法寺中真言密宗能満院										
84	嘉永6年	1853	02 / 15	沙門空海学法目録	写本	1冊	32	2-418	10-36	無言蔵	(能満院)
	(奥) 正安四年十一月二十日高野山愚老沙門慶賢八十二 / 嘉永六年癸丑二月十五日以印本校合之了 王城中央六角堂能満院住 無言							空海研究。			
85	嘉永6年	1853	03 / 00	梵学宗要章	刊本	1巻1冊	?	2-326	29-12	大願	能満院
	(奥) 于時嘉永六年癸丑三月 王城中真六角堂能満院大願謹書刻							憲海編。悉曇研究。			
86	安政4年	1857	06 / 26	十二天報恩経和訓	写本	1冊	29	1-378	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 安政四丁巳六月二十六日夕□以諸学真影本誓集内写之了 王城中心六角堂能満院大願六十										
87	安政4年	1857	12 / 01	即身成仏義	刊本	1冊	-	1-492	21-40	大願	(能満院)
	(版奥) 照応二年二月中瀬 高野山宝光院第二十四世末葉 応盛 (謹書) / 時安政四年丁巳十二月一日夜奉写校合訖偏為令法久住報恩謝徳也 / 王城中心 雲山六角堂頂法寺能満院大願謹記 (刊) 書肆 京都寺町五条上ル所 額田正三郎版							空海撰。			
88	安政5年	1858	08 / 09	科註 立世阿毘曇論日月行品	写本	1冊	17	2-397	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 右印本八行十二字二十丁一冊也 安政五戊午八月九日夜書写了 能満院大願六十一										
89	安政6年	1859	02 / 02	御室方 散華理趣三昧法則	写本	1冊	21	1-89	31-4	大願	(仁和寺)
	(奥) 安政六年己未二月二日御室書写小本清書之了王城中心六角堂 能満院 大願六十二							仁和寺。			
90	安政6年	1859	07 / 12	高祖大師年譜要略	写本	1冊	54	1-205	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 統弘法大師年譜第九卷二所載抜書之 安政六己未年七月十二日 京城六角堂能満院大願六十二							空海研究。			
91	安政6年	1859	09 / 11	梵本 瑜伽課誦	写本	3巻3冊	60・68・74	2-332	8-3	大願	(能満院)
	(奥) 享保三戊戌年十一月十五日河南九華山蔵版 / 安政六己未年九月十一日奉書写了 王城中真六角堂能満院大願六十二										

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
92	万延元年	1860	03 / 27	一乗戒壇院雜記	写本	1 卷 1 冊	15	1-33	9-36	大願	(能満院)
	(奥) 安永五年丙申十月二十二日 一乗沙弥敬光謹記 / (中略) / 近頃三聖影版彩色之頼時々有之仍為弟子等心得早々遂書写了 / 安政七庚申三月二十七日夕方 六角堂能満院 大願六十三										
93	文久元年	1861	10 / 29	金剛般若經驗益集	写本	1 冊	38	1-260	31-4	大願	(能満院)
	(奥) 文久元年辛酉十月二十九日夜丑ノ上刻書写了 六角堂能満院 大願六十四										
94	文久元年	1861	11 / 19	求開持伊勢朝熊岳口訣	写本	1 冊	44	1-157	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 文久元年辛酉年十一月十九日此口決勢州到来仍早々写得了 王城中真紫雲山六角堂頂法寺内能満院大願										
95	文久 2 年	1862	04 / 08	幸心 兩部合行法	写本	1 冊	38	1-205	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 天保二年辛卯五月十八日写得之了重而書 / 文久二年壬戌四月八日六角堂能満院大願六十五										
96	元治元年	1864	02 / 22	東寺声明決疑抄	写本	3 卷 1 冊	25	2-165	9-37	大願	能満院
	(奥 - 下) 本云 於和泉国家原寺西御堂書写之卒爾之間老毛難見分可書直之如意輪寺宥信 / 文政七甲申年三月二十三日於南山西院谷南室院以如意輪寺弘榮老師御本書写了重而 甲子二月二十二日諸南山ノ古本於六角堂能満院再写之了 大願 (六十七)										
97	元治元年	1864	05 / 13	毘盧遮那成仏神變加持經義釈	写本	2 冊	71・43	2-270	31-6	大願	(能満院)
	(奥) 元治元年甲申五月十三日右一軸彼社人松田新兵衛持来写得了 六角堂能満院大願六十七										
《記録》											
98	文政 3 年	1820	02 / 20	伝法許可灌頂印信	原本	2 紙	-	2-153	13-41	憲海	慈光寺
	伝燈大阿闍梨慈葱鐙慶→憲海 文政三年 (歳次庚辰) 二月二十日丙午 (尾宿日曜) 於慈光律寺										
99	文政 10 年	1827	03 / 11	本願方 印信 血脈	原本	2 紙	-	2-327	13-41	憲海	
	(印信) 阿闍梨前法務權僧正法印大和尚位禪忍→阿闍梨憲海 文政十年歳次丁亥三月十一日 (血脈) 大日如来→阿闍梨憲海										
100	文政 10 年	1827	03 / 23	西院流大事	原本	1 紙	-	2-191	13-41	憲海	
	深融→憲海 文政十年三月二十三日										
101	文政 10 年	1827	03 / 23	西院流大事並血脈	原本	2 紙	-	2-191	13-39	憲海	
	深融→憲海 文政十年三月二十三日										
102	文政 10 年	1827	03 / 30	伝法許可灌頂紹書血脈	原本	3 冊	-	2-153	13-38	憲海	醍醐寺 報恩院
	大阿闍梨僧正法印大和尚位淳覚→法印憲海 文政十年 (歳次丁亥) 三月晦日乙巳水曜畢宿於醍醐山報恩院										
103	文政 10 年	1827	08 / 26	西院流大事印信並血脈	原本	2 紙	-	2-191	13-40	憲海	
	大阿闍梨法印権大僧都龍肝→憲海 文政十年八月二六日乙亥火曜尾宿授与										
104	文政 11 年	1828	07 / 29	太政官符	写本	1 冊	11	2-472	31-4	無言蔵	京都烏丸 旅宿所
	(奥) 文政十一年戊子七月二十九日酉ノ刻於皇都烏丸通旅宿所書写之了本紙智積院沢寮居住力猛法印相承之本請之者 無言蔵										
105	文政 11 年	1828	08 / 03	高野雜筆集	写本	1 冊	50	1-214	31-4	無言蔵	高山寺
	(奥) 承安元年六月八日於理趣院書写了範果本也一交了 / 文政十一年戊子八月三於梅尾山高山寺楞伽山羅婆那宮 無言蔵										
《外典》											
106	天保 9 年	1838	11 / 06	疑仏四論	写本	1 冊	42	1-131	9-1	無言蔵	
	(奥) 天保九年戊戌十一月六日写得之了 小比丘 無言蔵										
107	安政 5 年	1858	12 / 06	文鏡秘府論	写本	6 卷 3 冊	57・65・71	2-293	31-2	大願	(能満院)
	(奥 - 5・6 卷) 安政二年丙辰十二月六日書写了 王城中真六角堂能満院大願五十九 安政五戊午四月六日夜如印本点等委ク校合了 印本云万治三年十月吉日雲樹宣音房之二百二十年成安政五年迄右ノ本智山淨客院淨眼法印ヨリ借受自四日夜至間六日夜校合訖大願六十一印版本ハ九行也										
108	安政 5 年	1858	12 / 25	七書正義	写本	7 卷 5 冊	55・80・62・80・49	2-455	31-2	大願	(能満院)
	(奥) 安政五年戊午十二月二十五日極寒書写了 王城中真紫雲山六角堂頂法寺能満院大願 (六十一)										

通番	書写年月日			書名	区分	員数	丁数	智山書庫所蔵目録頁	智山書庫棚番	関連人名	関連地名
	奥書・刊記							備考			
〈縁起〉											
109	文久2年	1862	11 / 28	恵心僧都引接曼陀羅縁起	写本	1冊	15	1-42	31-4	大願	能満院
(奥) 文久二年壬戌十一月二十八日夜於王城中心六角堂能満院恵心僧都真筆曼陀羅大願六十五歳写得之了											
〈絵図〉											
110	(文政5年)	(1822)		高祖大師御真蹟卒塔婆之写	写本	1紙	-	1-205	27-38		高貴寺
(奥) 高祖大師真筆卒塔婆両面双鉤写 從來河州葛城山高貴律寺不動堂在焉								伝空海筆。田村宗立旧蔵粉本に年紀あり。			
111	文政9年	1826	02 / 28	本朝法中衣服図	写本	1巻	-	2-489	31-5	無言蔵	長谷寺 小池坊 方丈
(奥) 文政九丙戌年二月二十八日於和州豊山小池坊方丈親蒙亮恭僧正之免許図写之了 無言蔵憲海											
112	弘化5年	1848	08 / 28	金剛界三昧耶曼陀羅図	写本	1巻	-	1-245	31-5	無言蔵	高山寺
(奥) 今此写原本山城八幡田中善法院聖經ノ内有之云云 嘉永元戊申八月二十八日於梅尾山写得之了 無言蔵並資現光											
113	嘉永4年	1851	11 / 04	道具図	写本	1巻	-	2-163	31-5	無言蔵	能満院
醍醐三寶院並遍智院灌頂道具絵様等(奥) 右醍醐報恩院御蔵中本薄様紙奥書分鳥子紙也ノ嘉永四年辛亥十一月四日於皇都六角能満院写得畢 無言蔵								報恩院流。			
114	嘉永7年	1854	03 / 15	大曼陀羅惣図	写本	5枚	-	2-104	31-5	皆了	能満院
(奥) 大悲胎蔵大曼陀羅新写五彩図牡丹草東西南於嘉永七甲寅三月十五日 京六角堂能満院内 皆了房憲能写得之了								皆了は憲海弟子。			

